

日本手術看護学会「手術看護の日」イベント 2026

エッセイ「手術室看護師とのエピソード」(一般の部)

最優秀賞受賞作

ギュッとね

長谷川餅夫

心筋梗塞で呼吸困難になり、救急車で運ばれ、アブレーションカテーテルの手術を受けることになった。

病室の看護師さんたちは、数日の入院で顔見知りになっていた。けれど、手術室の看護師さんとは初対面である。しかも私にとって初めての手術だった。

執刀医は前日、病室まで来てくれた。

「二時間で終わりますから、ご安心ください」

そう言われても、不安は消えなかった。

当日、準備室で説明を受けている時、手術着の紐が緩いような気がした。妙に気になって仕方がない。それに気づいた手術室看護師さんが、私の前にかがんだ。

「結んでおきますね」

彼女は紐を締め直し、力強く言った。

「ギュッとね」

その一言が、なぜか胸に染みた。手術着の紐だけでなく、ほどけそうだった私の不安まで結んでくれた気がした。

麻酔で、私はすぐ眠った。

目が覚めたのは五時間後だった。予定の二時間では終わらなかった。意外に重症で、時間がかかったのだという。

その時、真っ先に妻のことが気になった。二時間で終わると聞いて、待合室で待っているはずだ。三時間、四時間、五時間。どれほど心配しただろう。

病室に戻ってから、妻に聞いた。

あの手術室看護師さんが、手術途中の休憩時間にわざわざ来てくれたという。

「まだかかりますが、大丈夫です」

そう伝えてくれたらしい。

私はその看護師さんの名前を知らない。顔もマスク越しで覚えていない。それでも、二年たった今も忘れられない。

手術着の紐を「ギュッと」結び、夫婦間の絆を強くしてくれた人。

素晴らしい手術室看護師さんだった。

(講評)

手術前は不安がいっぱいで、何気ないことが気になってたまらない。それに気づく手術室看護師の行動と短い声掛けで、患者さんのほどけそうな不安な心を結び、夫婦の絆まで結んだ関わりが素晴らしい。そのような看護ができる手術室看護師は、いろいろなことに心配りができる看護師であることも再確認しました。

手術着のひもを締め直したときの手術室看護師の言葉と行動が、不安を安心に切り替えただけでなく、その後も手術時間が長引き、奥さんが待たされていることへの患者さん自身の心配と、待っている奥さんの心配を気遣い、休憩中に様子を伝えに来ている。それら手術室看護師の行為が、患者さんにご家族に安心や手術室看護師に対する信頼を与え、筆者が、患者さんにご家族の気持ちに寄り添うその関わりに感謝していることが表れていました。

©2026 日本手術看護学会

エッセイ「手術室看護師とのエピソード」(一般の部)

優秀賞受賞作

ズボラな神様

齋藤 静子

「病院に行かない」と4歳の息子が駄々をこねる。

手術が嫌だからだ。

手術は大人でも怖い。4歳の子供にとっては、計り知れない恐怖であろう。

恐怖心を抱え麻酔科外来を受診すると、男性看護師が「おはよう。何して遊ぶ」と笑顔で話し掛けてきた。

息子は「かくれんぼ」と言って、サッと柱の陰に隠れた。看護師は「A君、どこに隠れたかな～」と探すふり。

『仕事中に子供と“かくれんぼ”って、こっちは怖いんだよ』と怒りを覚えたが、息子を探すズボラな姿にクスッと笑った。

暫くすると「A君、み～つけた。診察だよ」と息子の手を取り診察室へ案内してくれた。

その頃には、不思議と恐怖心はなく、私も息子も笑顔になっていた。

翌朝、手術室へ行くと昨日の看護師が「担当させていただきます」と言ってきた。

その瞬間、安心感と共に『手術は成功した』と根拠のない確信をした。

息子は“かくれんぼ”のお兄ちゃんだ。“かくれんぼ”しよ」と喜んでいる。

息子が全身麻酔で眠ると「A君、麻酔頑張りましたね」と声をかけてくれた。

私は「看護師さんが担当ですと言った瞬間に、もう何も心配はいらない。手術は成功したと確信しました」と伝え手術室を後にした。

手術が無事に終了し再び手術室へ呼ばれて行くと、既に息子は麻酔から覚めていた。まだ

朦朧としていたが「お兄ちゃんと“かくれんぼ”していたから怖くなかったよ」と言っている。

看護師さんと“かくれんぼ”をして楽しかった時の夢を見ていたのでしょう。

人は不安な時や困った時に『神様…』と願いを込めるが、病気になった時の本当の神様は傍にいる看護師さんだと痛感した。

看護師さんの関わり方ひとつで、ここまで安心できるとは本当に神業だと。

麻酔科外来で『怒りを覚え、ズボラ』と思ったことに反省だ。

それからは病院で会う全ての看護師さんに『神様』と感謝をしている。

P.S.退院後、息子は「大きくなったら“かくれんぼ”の看護師になる」と毎日話している。

(講評)

4歳のお子さんの手術という、親御さんにとって何より心細い場面です。麻酔科外来での“かくれんぼ”に、最初は「こっちは怖いんだよ」と怒りを覚えたという正直な一文に、一緒にはらはらしました。それが、翌朝あの看護師さんが担当だと分かった瞬間、安心感や「手術は成功するという確信」へと変わっていく。その心の動きが手に取るように伝わってきました。

神様は、つらい時にすがったり、願いをかなえてくれる存在ですが、「本当の神様は傍にいる看護師さん」という言葉を、これほど自然に受け取れる作品はそうありません。何より息子さん「大きくなったら“かくれんぼ”の看護師になる」という結びに、思わず微笑んでしまいました。そして手術室で働く一人として、勇気づけられました。

©2026 日本手術看護学会

エッセイ「手術室看護師とのエピソード」(一般の部)

優秀賞受賞作

私たちはチーム！

津田 順弘

「私たちはチーム！」。どれほど力が伝わる言葉だろう。業務へのプライド、責任感、情熱、様々な想いが詰まったものであり、10年前、私の心に深く刻まれた一看護師の言葉である。

現在公務員の私だが、学生の頃から人の役に立ちたいという動機から献血をスタート、併せて骨髄バンクへのドナー登録を行った。以後約30年、献血には通い続けている。

ドナー登録のことも忘れかけていた頃、骨髄提供依頼の話が舞い込んだ。日々の仕事に追われていたが、職場の理解と協力もあり、ドナーとなる意思を固めた。誰かが困った場面に遭遇した時、躊躇なくその意思を行動に移せるか、自身の真価が問われるミッションであるとも考えた。

骨髄移植について、理解していたつもりではあったが、いざ手術を目前にし、自己血の採血、同意書類の作成。既に患者は放射線照射を受け、自己造血細胞が破壊されている事実も知った。後戻りする気はないし、患者サイドも生命を賭けた手術への想いも十分に理解できる。ただ、健康であるが故の手術、着々と準備が進められる状況が、漠然とした孤独感と不安を助長するのだ。

そんな時、看護師から「私たちはチーム！」という言葉をかけてもらった。不安がスッと軽くなる自分がいた。私の腸骨から骨髄が摘出され、患者に届けられるまで、医師、看護師、コーディネーター、全員が一丸となったチームプレイをしなければ成し遂げられないミッションであり、すべては患者の明日のために、ドナーとなった私もまたチームメイトの一人だと強く感じる事ができた。

あれから10年相変わらず忙しい毎日を送っている。患者の方は元気に回復したのだろうか。

知ることはできないが、そうであってほしいと、ふと思い出すことも時々ある。

ドナーとしての役目を卒業する年齢が近づいている。チームメイトだった看護師たちが、第一線で今日も生命と対峙していることに、心からの尊敬とエールを送りたい。

（講評）

骨髄移植のドナーを経験され、健康であるにも関わらず手術を受ける中で、レシピのことを考え、「チーム」という認識で医療者と同じ思いで対応されたことに感銘を受けました。また、孤独感や不安に対して、看護師の「私たちはチーム！」という声かけで不安が軽くなり、チームの一員として、ドナーとして骨髄移植を乗り越えた様子がとてもよくわかりました。

手術室看護師に対してもエールを送ってくださっており、患者さんの手術に対する思い、手術室看護師に対する思いも表現されたエッセイです。

ドナーである筆者の決意を後押しし、不安を軽減したナースの声かけ、みんなで患者さんを助けるという一体感が、「私たちはチーム！」という一言に集約されていました。